「きょうだい」の支援のための研修会に出席して

先日、障害児の「きょうだい」支援のための講演とパネルデイスカッションの研修会に出席した。

講演の一つに、ある病院の外来で心身に変調をきたした「きょうだい」のカウンセリング等に携わる専門家による事例の数々を通しての話があった。
講師は、「きょうだい」の一部の症例と断って話してはいたが、聴講の方々の中には我が子の障害の受容に、まだ心の揺れ幅が大きいだろうと思う若い親御さんたちも多く見かけただけに、「きょうだい」も先々精神的にも色んな問題を抱えるのかという不安を抱かせているのでないかと、聴講していて思った。

「きょうだい」に「精神面で何か心配事が生じたら、直ぐに専門家に相談するように！」との話だったが、そうならないために、日頃から親は「きょうだい」とどう係わり合えばいいのか、また、関係者同士（親と「きょうだい」の担当保育士、担任教師、等々）がどうあることが望ましいかのヒントを踏み込んで話して欲しかった。
講演後、そのことを尋ねようと思ったが、講演時間もオーバーで質問時間はなかったのが残念！

専門家の講演の中には、得てして自らの専門性に酔っているのかと思うものがしばしば…。
講演は、聴衆はどういう立場、またどういう心情の方々で、どういうことを求めて聴講しているかを念頭に置きつつ、講演して欲しいものである。

私がコーデイネターを頼まれての、親２人、「きょうだい」２人のパネラーによるパネルデイスカッションもあったが、コーデイネターが多く発言しては不味いかなと思いながらも、先の講演のことが頭から離れず、最後に、聴衆の中の関係者（プロ）向けに、つい「Not Doing, But Being．～寄り添い続け、日頃の親子の不安を取り除き、前向きに生きる勇気と喜びのヒントを与え続けるプロであって欲しい～」と、厚かましくも締め括った。

前向きな元気なご家族を少なからず知っているので、その家族間の係わり合い方を紹介したかったが、コーデイネターが主にしゃべる訳にいかず、今も自分の中での消化不良の感を拭えていない。

追伸：パネルデイスカッションの中でも少し触れたが、私の「きょうだい」支援の観点は、「雑学 BN」の福祉・教育・医療関係（Ⅳ）、2007.06.14.「障害児の『きょうだい』への支援の本質的な視点とは」に掲載していますので、参照ください。

阿部幸泰　　（2008 年 11 月 23 日　記）